

整形外科の1994年

整形外科医長 小林 昌幸

1994年3月までは、小林、飯田、大学からの1年目（3ヶ月交代）の3名体制であり、4月からは、小林、後藤、坂本の3名となった。後藤は股関節を中心とした下肢が得意であり、小林は上肢が専門であり、坂本は5年目の研修医という、過去10年間の当病院整形外科のなかでは最も充実したスタッフがそろった年であった。そのため仕事量が飛躍的に増加した。

整形外科外来では患者さんの待ち時間を減らすため、4月から予約制を導入した。当初は多少の混乱はあったものの、予約制が徐々に患者さんに浸透し、再来患者さんに関しては待ち時間は0分から30分程度となっている。しかし、現在でも、急患を除く新患では予約なしでの受診数が毎日10から20名程度もある。これは予約なしで受診する患者さんの待ち時間をかなり長くするだけでなく、既に予約をもって受診する患者さんの診察開始時間をも遅らせるため、予約制をさらに確実にするための努力が必要である。特に、周辺町村からの患者さんに予約無しの傾向が高いため、周辺町村への広報などでの周知が必要であろう。外来患者数は図1に示すように毎日平均150から160名である。1993年と比較しさらに患者数は増加してい

る。火曜と木曜は手術日であり、外来は新患日であるため、月曜、水曜、金曜の外来は超多忙である。手術件数も経年的に増加している（図2）。整形外科のベッド数は現在48床である。この数は当科の現状では明らかに大幅に不足している。ベッド利用率は毎月殆ど95%以上である（図3）。外傷の急患用に常時男性1床、女性1床は確保が必要であることを考えると、実際は常に満床であると考えられる。図4に示すように入院待ちの患者数は常時35から45名はいる。外傷の急患が24時間いつでも入ってくるので、空床がなかなかできず、入院待ちは時に3-4ヶ月にも及ぶ。急性期を過ぎた術患は、早期に退院していただくか、市内の病院のみならず登別国立病院へ転院していただき、リハビリを行っている。また1994年は頸髄損傷の多発年であり、年間10名が入院した。現在でも、受傷後数ヶ月以内の頸髄損傷の患者さんが7名入院している。48床しかない病棟で、限られた看護スタッフのなかで、これらの患者さんの今後のケアをどうするかが大きな問題である。

最後に、多忙にわたる毎日の外来、病棟の仕事を努力して行っておられる看護スタッフの皆様に深く感謝したい。

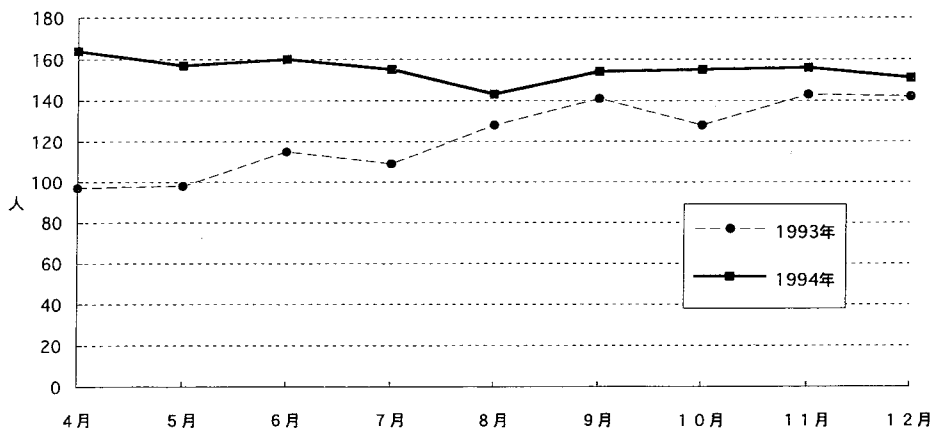


図1. 一日あたり外来患者数の推移

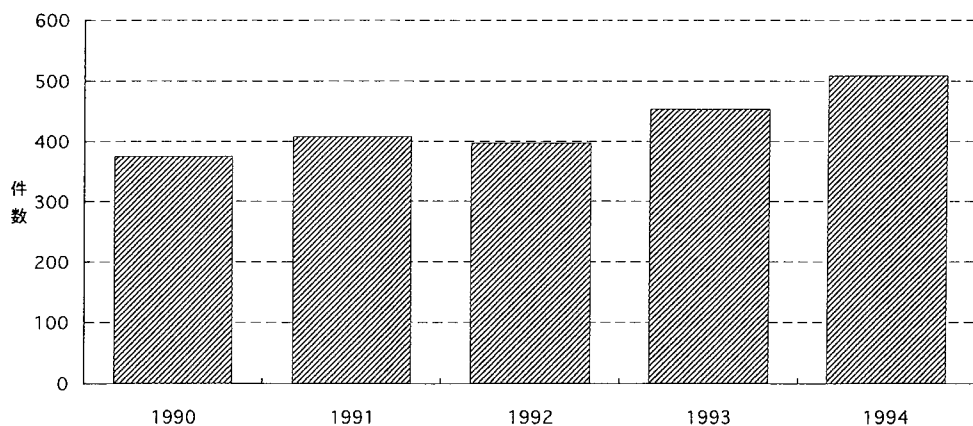


図 2. 手術件数の年推移

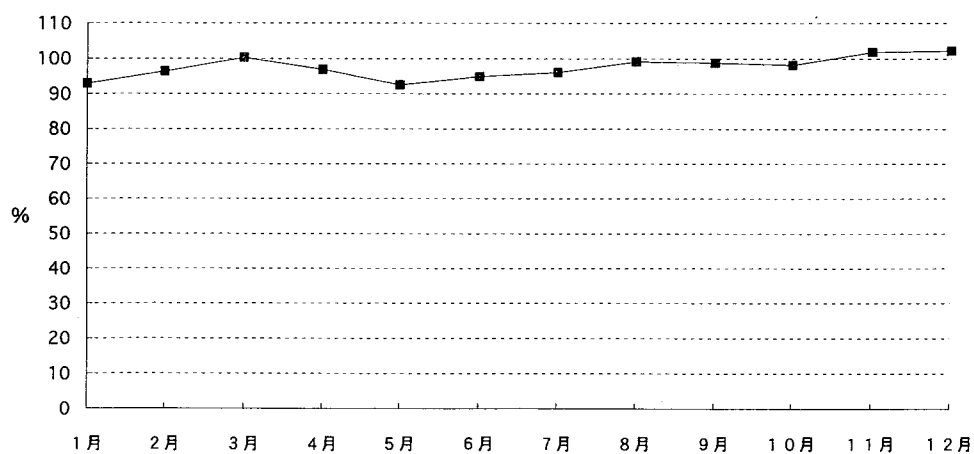


図 3. 1994年度整形外科ベッド利用率

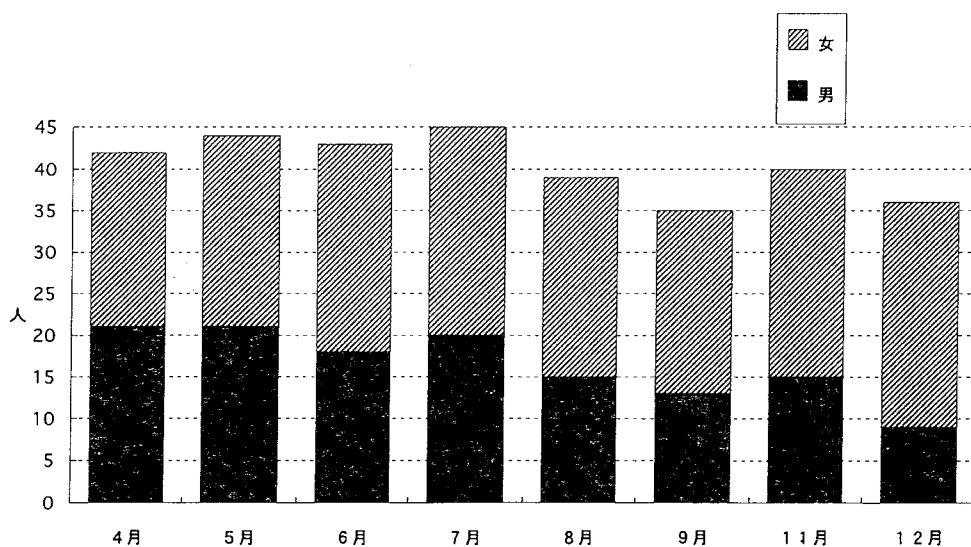


図 4. 1994年度入院待ち患者数